

# 宗達四季草花下繪光悅書歌卷

矢代幸雄

## 一

宗達筆金銀泥下繪光悅書の歌卷としては、最も有名なる故大倉鶴彦翁愛玩の蓮の下繪百人一首歌卷が大正十二年の震災に失はれたるを別にし、益田男爵家所藏群鹿下繪の一卷及び團男爵家所藏四季草花下繪の一卷は現存の雙璧をなして、鑑賞家の讚歎措く能はざるところであるが、近時等はの二名卷と下繪の清秀、書の溢美、に於て相拮抗するのみならず、光悦宗達合作の落款印章まで同じく完備して申し分なき一卷が某家に出現したるは、斯界を驚倒したる一欣快事でなくてはならない。是等の三卷は各自獨得の妙趣あり、以つて光悦宗達といふ二大天才の藝術的聯關を確證して、從來動もすれば兩者の關係に就いて抱かれ易かつた或る種の疑問を全く雲散霧消せしめた。即ち新らしき一卷の出現は、既知の二卷に對してその光悦宗達關係資料としての價值を一層強化したのであつて、將來同問題を研究する者にとりては、是等の三卷を精査することは、考察の發足をなすと考へらるゝのである。余が茲に殆ど世間周知の團男

宗達四季草花下繪光悅書歌卷

爵家の名卷を再び丁寧に見直さんとする所以は、その華麗にして然も蕭散の氣を藏する日本的美の極致を幾度繰り返し眺むるも飽くことなき歡びに誘はれたばかりでなく、その根本資料的價值を余の企圖する光悦宗達研究の上に再認識せんが爲めである。實に先頃團男爵の好誼により、その貴重なる名卷を久しぶりに親しく手澤展開しつゝ、春より秋に移り行く諸花を追ひ、また料紙の色變りの變遷に殆ど季節と氣象との換轉を感じたる清樂は、永く忘れ難きものであつた。光悦宗達の二大藝術の交響に泌み泌みと心耳を傾けることは、日本的美の展開を感得する上に最大なる練成たるを深く誨へられたのであつた。

## 二

本卷は、裝潢、表紙に綠地葡萄龍文様の緞子が貼られ、見返しは金箔押の地紙、軸は黒塗である。全長三〇尺二寸八分(九一七・六糎)、豎一尺一寸一分五厘(三三・四糎)、料紙は色變りにて、十枚の紙繼ぎ。第一

紙、白色、長さは少しく切られて二尺九寸強（八八糎）。他は總て本來の紙の長さと覺しく略三尺〇寸四分六厘強（九二糎強）。第二紙、淡き縹色。第三紙、淡褐色。第四紙、白色。第五紙、縹色、第二紙よりも稍々色濃し。第六紙、淡黃色。第七紙、白色。第八紙、淡き縹色。第九紙、白色。第十紙同じく白色で終つて居る。是等の料紙は厚い鳥の子だちの良紙にして表裏共に厚き胡粉引き、即ち光悦の好みにより紙師宗仁が作つた謂ゆる光悦紙である。「紙師宗仁」の長方形の印章は巻物の裏に、第一紙の首端及び第三紙と第四紙との継ぎ目に、割印として捺されて居る。

（註）紙師宗仁は普通に宗二と呼ばれて居るが、この印によれば宗仁と讀む方が正確らしく思はれる。この印は紙継ぎの間に割印として捺され、そして紙継ぎに動きがあつて印の左半は失はれて居るので、果して仁であつたか二であつたか解り難いが、仁と察する方が自然らしい。またそう讀む方が鷹峯古圖に筆屋妙喜の隣家に住む「宗仁」と合致する。また森田清之助氏が「鷹峯餘韻」に於て、本巻を叙して紙師宗二の朱印が押捺されてあつたとあるは、銀泥捺しの誤記である。

第一圖 宗達四季草花下繪光悦書歌卷紙背・宗仁印記（縮寫）

圖案化して最も艶美なる下繪を描いた。

先づ白の料紙に、爛漫として満開の花を重たく著けた若木の櫻は、縦横に枝差し交はして豪奢比類なく、それより數株の大本が空に花の傘を擴げる間を抜ければ、一際よく咲き揃つた梢は、團々たる花雲をそのまゝの花の大塊を成して、咲きも残らず散りも初めず、麗春は茲に極まつたかの觀がある。このあたりは料紙が縹

色に變つて居て、花を取り圍むは正しく淡青に霞んだ空、陽光燦々と降り灑いで金銀の櫻花は朝日に輝やぐばかりである。常に櫻花に綴らるゝが如き日本繪畫と雖も、これ程めだたき花の描寫は稀有にして、之を以つて櫻花畫の秀逸を見るに何人も躊躇しないであらう。

櫻盡きて初夏、料紙の色も暖き淡褐色に變つた。旺盛に伸びた藤の蔓

は畫面一ぱいに纏繞して、勢よく青葉を吹き出し、また紫花の房を到るところに釣り懸けた。銀泥で放膽に描かれた花の房は程よく暗紫色に焼け燻んで、世にも澁い紫藤花ではある。藤棚らしく行儀よく並んで垂れた花の房の下には、躑躅も大きい星形の花を誇らかにもたげて居る。この間に料紙は白、縹、淡黄と三度色を變へて、空氣の變化を見せるやうである。

是等の色變りの料紙の上に、宗達は金銀泥を以つて四季草花の變遷を

白色に歸つて、天地の氣は澄み、萩の下枝はちらちらと細かい花を著けたと思ふうちに、秋の野は萩混りに蓬々と廣がつて、末は果てもなき薄野である。次第に凋落して横様に倒れ臥す萩生の間より抽んで、薄の穂は秋の精を天空に向けて花火のやうに吹き出し、縦横無盡に曲線を駛らせた。そして武藏野の秋を行く人が、丈高き薄の向ふにぼつかりと大きな月を見出すやうに、そこにはまた途方もなく大きい半絃の月が突如として現はれた。縹色の夕空に、銀焼けの月はうす紫に霞んで、凄艶なる秋は今や闌干たる風情である。

見る花もなき冬は、濱邊に立ち並ぶ老松のたゞすまひを描く。料紙は白。老松の幹は踊るが如く屈曲し、濱の入江も複雑に出入して居る。その間に夥しき千鳥が群れ飛ぶ。實に夥しき數の小鳥は銀色の體に金の嘴と金の脚とをちらつかせて、濱邊を横切り松林の梢を筋交ひに掠めて、あとからあとからと飛び立ち、空も海もべた一面に金色銀色の縞飛白になった。

そして卷の終る最後の下隅に、丁度濱松の根元に程よく、下繪の筆者宗達は、大きい伊年圓印を捺した。

#### 四

この金銀泥下繪の上に、光悦は名筆を揮つて大振りの草書にて、千載和歌集の櫻花の歌二十五首を散らし書いた。今これ等の歌に詠人の名を添へて寫せば、左の通りである。本字は光悦の書いた通りにして、唯だ變態假名のみを普通の假名に改めた。

待賢門院堀河  
白雲とみねの櫻はみゆれ共つきのひかりは隔さりけり

上西門院兵衛  
華の色に光さしそふ春の夜その間の月は見るへかりける

大宰大貳重家  
をはつせのはなの盛をみわたせは霞にまかふみねのしら雲

藤原範綱  
さ、波やかならの山のみねつゝき見せはや人にはなのさかりを

皇太后宮大夫俊成  
三芳野の華の盛を今日見ればこしのしらねにはるかせ(そ)吹

白川院御製  
さきしよりちるまてみれば木の本にはなも日數もつもりぬる哉

院御製  
池水にみきはのさくらちりしきて浪のはなこそさかり成けれ

大宮前太政大臣  
しら雲とみねにはみえて櫻華ちればふもとの雪にそ有ける

藤原季通朝臣  
よし野やまはなはなかはにちりにけり絶々のこるみねのしら雲

内侍周防  
やまさくら惜心のいくたひかちるこの本にゆき歸らむ

大納言長家  
春雨にちるはなみればかきくらしみそれし空の心ちこそすれ

赤染衛門  
踏はおしふまては行むかたもなし心盡の山櫻哉

前中納言匡房  
やまさくら千々に心のくたくるはちるはなことにそふにやあるらむ

藤原仲實朝臣  
華のちるこのした陰はをのつからそめぬさくらの衣をそきる

藤原基俊

はるをへてはなちらましやおく山のかせをさくらの心とおもは、

右兵衛督公行

あらしふく志賀の山邊のさくら華ちれ(は)雲井にさゝ波そたつ

前參議親隆

はるかせにしかのやまこえはなちれはみねにそ浦の波はたちける

左近中將良經

さくら咲ひらの山かせ吹まゝにはなに成行しかのうらなみ

右近大將實房

ちり懸はなの錦はきたれとも歸む事そわすられにける

權大納言實國

あかなくに袖につゝめはちるはなをうれしとおもふになりぬへきかな

權中納言通親

さくらはなうき身にかふるためしあらはいきて散をはおしまさらし

俊惠法師

みよし野の山したかせやはらふらむこすゑにかへる花のしら雪

源有房

一枝は折てかへらむやまさくらかせにのみやはちらしはつへき

道因法師

ちるはなを身にかふはかり思へともかなはて年の老にけるかな

覺盛法師

あかなくにちりぬるはなをおも影やかせにしられぬ櫻なるらむ

以上の歌を書き終つて、卷末に宗達の伊年印の前に少し間を置いて

「大虚庵 光悦」の落款と花押とを入れて居る。

偕てその光悦書であるが、それはこの巻が大きいだけに、頗る大振りに書かれ、寛濶なる光悦の人の柄を見るやうである。而して殊に光悦の妙

四

味を發揮して居る點は、下繪に合はせたる書の散らし方にて、或る時はあまりに美しく描かれたる下繪を避け、また或る時はその上に向無頓著に書きつけて、細心と放膽との使ひ分けは驚歎す可きものがある。歌は大抵五六行に分けて書いてあるが、概して細き假名書きの駛る間に、ぼたりぼたりと非常に筆太に滴らんばかりの墨色の本字を混へ、單調を破つて居る。それは華麗と豪宕とを兼ね備へたる光悦の圖案的天才を思ふ存分に發揮したと言ひ得る。

五

この巻は、光悦の落款に大虚庵の肩書があるによつて、光悦の比較的晩年の製作なることが解る。光悦が家康より鷹峯の土地を賜はりたるは元和元年、即ち光悦五十八歳の時、而してその後間もなく同地に移り住んだであらうが、大虚庵を果して何年に建てたか明瞭には判らない。光悦の晩年には落款に鷹峯山とか鷹峯隱士とか専ら鷹峯關係の肩書を加へ、且つその或るものには大虚庵の庵號も添へて居る。落款に於ける大虚庵の初出は元和五年光悦六十二歳の立正安國論書卷であるから、その時には最早同庵が建てられて居たに相違なく、従つて團家歌卷の製作もその頃よりあまり遠く遡ることは出来ないと思はれる。而してまた光悦の極めて晩年、即ち根津家の朗詠卷に「鷹峯山大虚庵歳六十九 印」とある以降は、好んで年齢を書き添へるやうになつた。是は天壽を樂しむ老齡の光悦として極めて有りそうな事である。團家の歌卷には大虚庵とあるのみにして、未だ年齢書きの無いことより、余はあまりに晩年ではなく、



元和末より寛永の初めに亘る頃に作られたのではないかと想像する。

この落款より推定したる製作年代は、余の理解する光悦書風の變遷にも略ば合致すると思はれる。團家の歌卷は純粹に光悦書として見れば、その最上なるものではない。それは巻頭の「白雲とみねの櫻は」にしても、中頃の「さ、波や」「三芳野の」「池水に」「波はたちける」にしても、或はまた巻末に近き「一枝は折てかへらむ」にしても、大きい本字の書き方に一種の筆法を誇張して拈ねりたるが如き澁滞の風あり、光悦書の代表作、歌卷で言ふならば、震災焼失の大倉家の蓮の巻、或はそれほどでなくとも益田家の鹿の巻に於けるが如き、快暢を極めたる筆さばきは見られないのである。余の理解するところによれば、光悦はその最も盛であつた四五十の間、即ち慶長より元和の初めにかけて、専ら王義之より發したる流麗なる和様を學び、特に自ら珍藏し且つ學習したる道風といふ本阿彌切の感化を受けて、圓轉活脱にして最も艶やかなる妙趣を發

第二圖 宗達四季草花下繪光悦書歌卷光悦落款(原寸)

揮した。その種の極致が蓮の巻であつたと思はれる。然るに鷹峯に隱棲し大虛庵を建て、以來は、齡六十を越えて漸く老蒼の氣を崩し、唐様に興味を持ち初めたものか、大師風の骨氣ある曲折も現はれて、多少くどい書き方になるのであつた。然しながら光悦の本性は何處までも艶美なる和様にして且つ之に桃山育ちの大人物らしく豪宕の風を加へたるものであつて、骨氣を露出したる唐様には適合せず、されば光悦の寛永時代の老筆にてその頃特に好んで漢詩を書いたものの中には、案外面白くない作品が見出されるのである。余は世に謂ふ光悦流にはその頃の光悦を摸したものも多く、小島宗眞、尾形宗謙等は、上手であつただけに殊更この種の誇張に陷つて嫌味を生じた、と解釋して居るのである。

いま斯くの如き書風の變遷のあつた光悦の經歷のうちに團家の巻を配すれば、余は既に老筆の兆が前掲の大きい本字の書きやうなどに現はれ居ると判斷する。然しながら未だ全部そうなり切つては居らず、慶長元

第三圖 同上宗達印(原寸)

和時代の流暢なる純和様の筆の運びは、その古筆切に見るやうな裝飾的な文字の散らし方と共に、隨所に殘存して、何と言つても本卷を光悦書の歌卷中の雄作に位せしむるのであつた。丁度落款に大虛庵とのみありて行年書きの無きは、この卷が元和後半に大虛庵が出来た以後、然しながら未だあまりに老齡を誇るに足らざる期間、即ち元和末より寛永の初めにかけての或る年に作られたことを示すものではなからうか。

而してこの期間は、下繪の作者宗達の畫風より考へても無理が無いやうに思はれる。宗達は元和七年に養源院の襖及び杉戸に描いて居る。豊臣秀吉の夫人淺井氏が父長政菩提の爲めに建立したる同院が燒失したるを同じく長政の女なる徳川秀忠の夫人崇源院が再興したほどの養源院に、宗達が選ばれて襖繪を描いたことは、宗達が既に畫家としての一家をなして居た證據であり、また同院の遺作に徴するも、宗達の畫風は既に時流を抽んで豪華なる裝飾體をはつきりと確立して居た。更にそれより遅るゝこと十年、寛永七年には宗達は法橋位に昇つて居て、且つ禁裏本の海田采女筆西行物語摸寫の命令を受けて居たことが、毛利公爵家所藏西行物語の奥書に於て烏丸光廣によつて談られて居る。而してその西行物語を見れば、古畫を寫しながら宗達の畫風は既に充分に圓熟の境に達して居る。原本の大和繪の技法は全く宗達の奔放にして華麗なる圖案的筆致と色彩とのうちに融解して、摸寫として見れば随分思ひ切つて獨創的である。團家の歌卷の製作は恐らく宗達の養源院障壁畫と西行物語との間か或はその近い頃に配せらるゝと思ふのであるが、歌卷の下繪が示したる渾然たる裝飾畫風は、宗達畫の年代的標準になる兩作に比して、何等背馳するところは無い。

## 六

六

以上に於て團家歌卷の略述を畢つて、最後にそれに對する綜合的な藝術批判の問題が残るが、余は本卷を單に光悦書としては最上のもではないとするも、宗達下繪の艶麗さに於ては、同種の歌卷中優に第一位に位し、また光悦宗達二大天才の全く呼吸の合ひたる合作として見て、これ以上のものは無いと信じて疑はないのである。現存三卷の合作卷の傑作のうち、何れも獨特の長所あつて優り劣りはなく、鹿の卷は警拔なる下繪の意匠と書の典雅さに於て秀で、新發見の某家の卷は豪宕なる竹幹と梅枝とを描きたる筆力、竝に變幻窮まりなき鳶の金泥描を以つて宗達畫として全く他を威壓するのであるが、團家卷はその下繪の題目が既に四季草花の艶なるに加へて、それを色變りの料紙に描いてあるので、その總てを取り集めたる美しさは、一際沓え渡つて見えるのである。單に意匠或は繪畫として判斷すれば鹿の卷、竹梅鳶の卷は、或は一段と非凡なりと言はんと、料紙下繪及び書の各々が渾成調和して玲瓏玉の如く澄んだ味ひに至りては、團家卷特有の妙趣と言はざるを得ない。

而してこの渾成美を完全に支配するものが光悦の大きい心なるを、今更の如く感するのである。この下繪に於て、宗達は全く宗達にして然も光悦支配下の宗達である。下繪は料紙の彩どりを生かし、更にまたその上に豐潤なる光悦の名筆を載せて、美しきが爲めにすつかり落ち付いて居る。艶は艶であつても、萬事裝飾的にその所を得て、靜かである。余は宗達の天才を育てたものは寛厚にして富麗なる光悦周圍の雰圍氣であつ























たらうと思ふ。而してまたこの雰圍氣のうちに光悦の大人格が豪放に動いたことを感ずるのである。この下繪の四季草花の上に、光悦は千載集の櫻花の歌ばかりを二十五首も書いた。巻頭の爛漫たる櫻花が終り初夏の藤となり萩薄の淋しい秋の下繪になつても、尙ほ一向平氣に光悦は華やかなる櫻花の歌ばかりを書いた。平凡なるものには一寸出来ない藝當である。然しそれが如何に面白く効いて居るであらう。下繪と和歌とが常に密著して居るのでは、當然なるものが其所に在るだけの退屈さがある。異種の美が不合理に交錯し混淆するところに、不羈奔放なる美の憧憬がある。斯くの如きは日本美術に屢々に示されたる特色の一つであるが、光悦がそれを無拘泥にやつてのけて居るところに、彼の大人格に許されたる非凡なる我儘がある。光悦はこの我儘を押し通すといふよりも寧ろ自然にそれを以つて感化して、彼の周圍には自ら光悦藝術の雰圍氣が醗酵した。宗達はこの雰圍氣中の偉人であり、團家卷はこの雰圍氣の渾然たる凝集である、と余は解釋するのである。

因に記す。この團家卷はもと洛北曼殊院に在つた由が、同卷に添付する故岸光景氏の書狀に記されて居る。この卷は大正四年第一回光悦會が鷹峯に催された時大阪戸田彌七氏によつて出陳せられ、故團琢磨男爵が之を購入された。團男による本卷の獲得は光悦宗達愛好者の間に甚だ注意を引き、團男がその頃益田男を訪ねて鹿の卷を一見し、祕かにその卷末の伊年圓印に紙を押し當つて寸法を計つたところ、益田男は直ちにそれを觀破して、新收の卷の伊年圓印と合せて見る爲めであらう、と指摘した、などといふ逸話が好事者の間に残つて居る。